

## J. S. バッハ 《カンタータ第82番》 “我は満ちたれり [Ich habe genug]” BWV82》の研究

上 野 正 人\*

(平成15年4月30日受付；平成15年6月16日受理)

### 要 旨

宗教カンタータや宗教オラトリオなどに代表される J. S. バッハの声楽作品を演奏するに当たり、彼の用いた音楽言語の理解、それによる表現意図の分析は、演奏家にとって必要不可欠の要素である。本稿はその考えに基づき、《カンタータ第82番 “我は満ちたれり [Ich habe genug]” BWV82》(以降《カンタータ82番》と表記)の分析研究を行ったものである。

《カンタータ第82番》において、J. S. バッハと歌詞作者は、福音書の注釈による会衆の理解という目的のために、ルカ伝2.29にあるシメオンの「満ち足りて死を思う」言葉をその中心として描いた。そして、その「死」の思いを焦点化し発展させることによって「聖霊の啓示の成就の喜び」という主題を浮き上がらせた。また、その歌詞は祈る「私」たちとも密接に関連づけられ、さらにバッハの圧倒的な表出力を持つ音楽言語によってそのテーマはより具体化され、映像を見るかのような具体性をもって聴衆に訴えかける。福音書内容の音楽と歌詞による追体験、それによる学習と理解という構想をもって J. S. バッハと歌詞作者はこの作品を制作したと考察する。

### KEY WORDS

Kantate      カンタータ      J. S. Bach   J. S. バッハ  
Figurenlehre   音型論・音楽修辞学

### 1 はじめに

教会カンタータは、J. S. バッハの声楽作品群の中心をなす楽種である。教会カンタータは当時のルター派礼拝においてその日に朗読される福音書章句の内容を会衆に分かりやすく注釈し伝えるという意味において、説教とともに重要な部分を担っていた。今日も聖トーマス教会の礼拝においておなじ重要性をもって演奏されている。それら教会カンタータはバッハの生涯にわたって制作されているが、特に聖トーマス教会のカントルに就任してからの2年間はその作品数は非常に多い。それは、カントルとしての職務から必要とされたことが理由としてあげられる。

教会カンタータは、前にも述べた通りその日の礼拝で朗読される福音書章句の内容を分かりやすく注釈し、会衆に伝えることがその目的であった。楽曲の構成はカンタータの制作年代によって違いがあるが、主に合唱、マドリガーレ風に創作された自由詞によるレチタティーヴォとアリア、そして福音書章句などによるコラルである。本稿で取り上げる《カンタータ82番》

---

\* 芸術系教育講座

は、彼の聖トーマス教会カントル就任5年目に当たる1727年の“マリアの潔めの祝日”のために作曲され、同年2月2日ライブツィヒにおいて初演された作品である。この作品は前年に作曲された《カンタータ56番》とともにバス独唱のための教会カンタータの名曲として広く知られている。歌詞は、この日の礼拝で朗読される福音書章句であるルカ伝2.22～32を注釈する形で作られている。この作品の楽曲構成上の大きな特徴として、コラール楽章を持たない、独唱だけによる作品という点があげられる。そしてその内容は、この日に朗読される福音書章句である「聖霊の啓示の成就」を体験したシメオンの感動に満ちた言葉であるルカ伝2.29～32と深く結びついている。これらの諸特徴をふまえ、バッハがどのような表現技法によってこの主題をどのように表現したかを彼の音楽言語の観点から分析し、演奏表現につなげようというのが本稿の目的である。

## 2 歌詞の分析<sup>1)</sup>

### 2.1 第1曲

Ich habe genug, ich habe den Heiland, das Hoffen der Frommen,  
auf meine begierigen Arme genommen; ich habe genug!  
Ich hab' ihn erblickt, mein Glaube hat Jesum ans Herze gedrückt:  
nun wünsch' ich noch heute mit Freuden von hinnen zu scheiden.

私は満ち足りている。私は信仰の希望である救い主を、切望する私の腕の中に抱いた。  
私は満ち足りている。  
私は彼を見、私の信仰はイエスを胸に抱いた。  
さあ、今日こそ私は喜びを持ってここから離れたい。

このカンタータは、この日に朗読される福音書聖句であるルカ伝2.22—32を注釈する形で作られている。第1曲の歌詞は、特にルカ伝2.29をそのまま用いているといっても過言ではない。聖霊の啓示であった「主が遣わすメシアに会う」<sup>(1)</sup>ことが現実となったシメオンのその瞬間の心の感動が、ここでは「Ich habe genug 私は満ち足りている」という言葉に集約されている。

### 2.2 第2曲

Ich habe genug.  
Mein Trost ist nur allein, dass Jesus mein und ich sein eigen möchte sein.  
Im Glauben halt' ich ihn, da seh' ich auch mit Simeon die Freude jenes Lebens schon.  
Lasst uns mit diesem Manne ziehn!  
Ach! möchte mich von meines Leibes Ketten der Herr erretten.  
Ach! wäre doch mein Abschied hier, mit Freuden sagt' ich, Welt, zu dir: ich habe genug!

私は満足している。  
私の慰めはただ一つ、イエスが私のものであり、私は彼のものでありたいということだ。シメオンとともにそのような人生の中で喜びを見いだしたとき、私は信仰の中で彼を抱いた。私を

この男とともに導きたまえ！

ああ、神が私を肉体の鎖から解き放ってくれるなら。

ああ、私はここから去るだろう、私は喜びをもって世に言おう：私は満ち足りていると！

この第2曲の歌詞は、前曲によって提示された主題である「Ich habe genug.」を冒頭に配し、この言葉から展開してゆく。第1曲に見られる福音書章句の直接的な利用による歌詞の作成は、このカンタータがシメオンの心を歌っていることを明らかにしているが、「im Glauben halt' ich ihn, da seh' ich auch mit Simeon die Freude jenes Lebens schon. 信仰のうちに彼を抱けば、わたしもまたシメオンとともにすでにあの世界の幸せを見るだろう。」の部分によって、明らかにシメオンとは別の存在、すなわちシメオンの出来事を思う「私」の言葉とも密接に関連づけられていると考えることができる。続く歌詞の内容は、ルカ伝2.25と密接に結びついている。「Ach! möchte mich von meines Leibes Ketten der Herr erretten. ああ、主が私を肉体の鎖から解き放ってくれるなら。」の「肉体の鎖から解き放つ」という部分は、聖霊の啓示の成就を体験する以前のシメオンの姿であり、それまでのシメオンは「イスラエルの慰められる」のを持ち望み、啓示の成就までは現世の苦しみの中に生活しているのである。「肉体の鎖」とはシメオンを現世と結びつけている「生」であり、彼の現実である。そして「解き放たれる」とは「生命」＝「現世」からの解放であり、彼にとって「死」を意味している。この分析から、歌詞はシメオンの思いと同時にこの出来事を思い、祈る「私」とも結びつけられていることがわかる。

### 2.3 第3曲

Schlummert ein, ihr matten Augen, fallet sanft und selig zu.

Welt, ich bleibe nicht mehr hier, hab' ich doch kein Teil an dir, das der Seele könnte taugen.

Hier muss ich das Elend bauen, aber dort, dort werd' ich schauen süßen Frieden, stille Ruh'.

まどろめ、疲れた眼よ、やわらかく、そして至福に包まれて閉じるのだ。

この世よ、私はこれ以上ここにとどまりはしない、おまえには私の魂のために役には立つものはない。

ここでは私は不幸を重ねるばかり、だが、あそこでは私は甘美な平和、そして静かな安らぎを見るだろう。

この第3曲の歌詞もやはりルカ伝2.29と密接に結びついている。「主よ、今こそあなたは、お言葉どおりこの僕を安らかに去らせてくださいます。」<sup>(2)</sup>にある「去らせる」とはシメオンがこの世から去ること、すなわち「死」を意味しているが、ここではその「死」を「まどろむ」と表現している。それは穏やかさであり、その「死」が「至福に包まれて」のものであることが表現されている。

### 2.4 第4曲

Mein Gott! Wann kommt das schöne: Nun! da ich in Frieden fahren werde, und in dem Sande kühler Erde, und dort, bei dir, im Schoße ruhn? Der Abschied ist gemacht, Welt! gute

Nacht.

神よ！いつその美しいときはくるのですか！

平安のなかへ、そして冷たい土の中へ赴くときは、そしてかの地、あなたの傍ら、御膝の中で  
安らぐときは？

別れをしよう。この世よ、おやすみと。

この第4曲はさらに「死」への思いが展開し、憧憬の念に満ちた表現となっている。一方、「死」とは、神の御許へ赴くことであると同時に、冷たい土の中へ赴くことでもある、とその「死」という現実を透徹した目で見据えている。そしてそのような対比は、さらに神の御許へ赴くことへの深い憧憬の念を際立たせている。

## 2.5 第5曲

Ich freue mich auf meinen Tod,

ach! hätt' er sich schon eingefunden.

Da entkomm' ich aller Not, die mich noch auf der Welt gebunden.

私は喜んで死を待とう。

ああ！死がすでに現れてくれるなら、

私が、私をこの世に結びつけているすべての苦しみから逃れるときに。

この第5曲では、第2曲、第3曲、そして第4曲と焦点化することで深められてきた「死」への思い、それこそが「私」の持ち望んでいるものであると直接的で率直な表現の中で表明されている。その「死」とは、「聖霊の啓示の成就」によって達成されたシメオンの満たされて思う「死」であり、そのことは「聖霊の啓示の成就」をさらに際立たせるという効果を上げている。

## 2.6 歌詞分析のまとめ

シュヴァイツァーが「この世のすべてから解き放たれた老人の天国への郷愁」<sup>(3)</sup>と解釈したように、歌詞のすべては「死」への思いに依っている。歌詞はルカ伝2.29に書かれている「安らかな死」をキーワードとして焦点化し、深めることによって、その主題が「聖霊の啓示の成就」の喜びであることがこの分析から明らかとなった。また、第2曲での分析によって、このカンタータがこの出来事を思う、祈る「私」にも密接に関連づけられていることが明らかとなった。

# 3 楽曲分析

## 3.1 第1曲アリア

オーボエによる印象深いオブリガート（助奏）によって開始されるこのアリアは、波のように揺れるヴァイオリンの音型の継続、規則的な刻みの通奏低音の動き、ハ短調という調性と相まって、熱い感動に満ちあふれた曲となっている。オーボエによって奏でられるこの動機（譜

例1)は、この曲の中で調や音型を変えるなど変奏の形で常に現れる。また、この動機は「Ich habe genug. 私は満ち足りている」という歌詞に当てられていることから、この曲を性格づける重要な動機であると同時に、この歌詞もまたこの曲における主題であることがわかる。この動機は、一気に6度音程上昇する音型(譜例1-1)によって、満ち足りた心の高まる感動を表現している。

〔譜例1〕



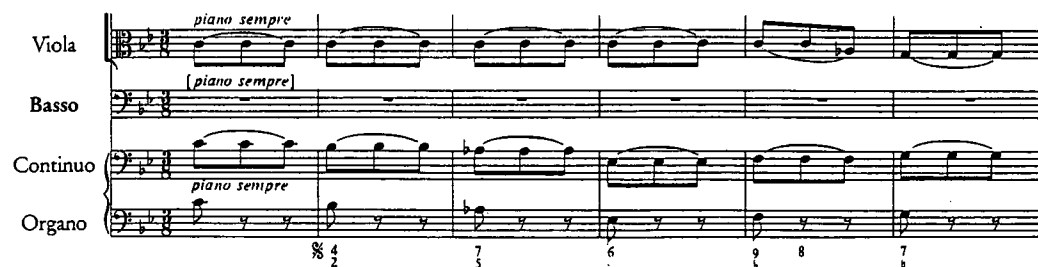
一方、弦楽器によって奏でられる音型(譜例2)は2度音程の中を波のように小さく揺れ動きながらタイで小節間がむすばれ、時として大きく高まる。このような表象的な動きは感動に震え高まる心の動きを音型によって具象化している好例である。

〔譜例2〕



そして常に8分音符を規則正しく刻む通奏低音(譜例3)はバasso・オスティナートと呼ばれる作曲技法であり、「惑わされず、動ぜずに」という象徴的意味を表現するときには用いられる<sup>(4)</sup>。これらの象徴的表現から、このアリアは聖霊のお告げの成就の喜びとその根底にある揺るぎない信仰による神への信頼を表現していると考察する。

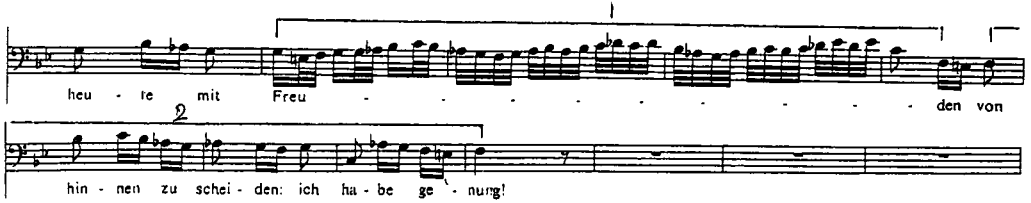
〔譜例3〕



また、この曲においても彼の逐語的な象徴的表現が随所に見られる。その表現は128小節から131小節および169小節から172小節にかけてコロトゥーラ音型によって引き伸ばされたFreuden(喜び)に見ることができる(譜例4-1, 譜例5-1)。

この音型は上昇することによってその喜びの高まりを表現している。そしてこの音の高まりの後、この旋律は下降する。(譜例4-2, 譜例5-2)。

## 〔譜例4〕



## 〔譜例5〕



これは「von hinnen zu scheiden: ich habe genug! ここから立ち去る：私は満ち足りている」という、歌詞が内包する意味、すなわち聖霊によって啓示された内容であるイエスをその胸に抱いた後に訪れる満ち足りた「死」を下降する旋律によって象徴的に表現しているのである。このアリアは、複合的に象徴的表現を用いることによって、歌詞の出来事と、そこに内包される意味を、同時に表現することに成功している。また、一つの主要な動機を多彩な変奏の手法を用いることによってその内容を伝えるバッハの卓越した技法も顕著に見られる。

## 3.2 第2曲レチタティーヴォ

このレチタティーヴォは、神学における数の象徴法で、三位一体なる神を示し、また神との関係における人間の生活原理を象徴する重要な数である「3」という数字が中心的な動機となっていると考えられる。まず、全体は3つの部分から構成されている。その第1の部分は冒頭から6小節目まで、第2部分は7小節目から8小節目のアリソーズ、そして第3部分は9小節目アウフタクトから最後までとなっている。第1の部分は次のように2つの文章からなっている。

Ich habe genug! 私は満ち足りている。

Mein Trost nur allein, dass Jesus mein und ich sein eigen möchte sein. 私の慰めはただ、イエスが私のものであり、私はイエスのものでありたいということだけだ。

その2つ目の文章は、主文節と副文節の2つからなっていて、そのことから第1部分全体は3つの文章からなっていると考えられる。バッハは、この歌詞に歌詞構成のとおり3つのフレーズで曲をつけている。このように第1部分は「3」を動機として作曲されているが、演奏する場合は、そのフレーズはdassをこえてmeinまで引き伸ばすという注意が必要である。(譜例6)。そのように演奏することによって、2つにわけて作曲されている副文節を文法上からつなげるような演奏が可能となる。この場合もやはり「3」つのフレーズとなること

には変わりはない。

〔譜例 6〕

続く第2の部分は7小節目から8小節目までの2小節間の Arioso である。この部分はバスソロとコンティニューによる純然たるカノン形式で作曲されている。(譜例7)。

〔譜例 7〕

カノンはキリスト教の規則のひとつであり、またその形式の特徴から「従う」「キリストのまねび」といった意味を表現するときに用いる<sup>(5)</sup>。ここでも「Lasst uns mit diese Manne ziehn! 私たちをこの男とともに導きたまえ」という「まねび」をカノンという作曲技法によって象徴的に表現していると考えることができる。

第3の部分は、一転して減7の激しさに変わる。

「Ach! möchte mich von meines Leibes Ketten der Herr erretten. ああ、主が私を肉体の鎖から解き放ってくれるなら。」

7度音程による表現は、「死」や「裏切り」といった「苦々しきもの」を表現するときにバッハが用いる音型である。ここでの歌詞は、「現世からの別離」＝「生からの開放」を強く願う内容であり、その歌詞にこの7度音程を用いることによって、「肉体の鎖＝現世の苦しみ」を表現している。

「Ach! wäre doch mein Abschied hier, ああ、ここから別れることができれば。」

この部分で旋律は hier につけられたりをきっかけとして、音楽は減7度の苦みの雰囲気から再び冒頭の穏やかさの中へ帰っていく。

「mit Freuden sagt' ich, Welt, zu dir: ich habe genug. 現世よ、私はおまえに喜びをもって言おう、私は満ち足りていると。」

ここで引き伸ばされ、飛翔するがごとく上昇し、穏やかな下降線を描く「Freuden 喜び」は（譜例 8-1）、まさに言葉の概念を音によって絵画のように描き出す象徴的表現であり、その晴れやかさは現世の苦しみからの開放を表現している。そして、穏やかな雰囲気の中で「ich habe genug! 私は満ち足りている！」と別れを告げるのである。この部分もバッハは象徴的表現を用いている。すなわち最後の音はこの曲の最低音であり、続くコンティヌオもそれに続くかのようにさらに沈んでいく。いわゆる「死」というものが魂の飛翔であり、肉体の「死」は土の中へ帰ることであると表現しているのである。（譜例 8-2）。このような象徴的な音型による表現には、バッハの透徹した死生観をも感じることができる。

〔譜例 8〕



### 3.3 第3曲アリア

A（1小節から36小節）-B（37小節から48小節）-A（49小節から67小節）-C（68小節から85小節）-A（1小節から36小節）という形式で作曲されているこのアリアは、「すばらしい死の子守唄」<sup>(6)</sup>とシュヴァイツァーが称したように、穏やかで満ち足りた雰囲気に包まれている。まず A 部分は、旋律の 2 番目の音が上昇、あるいは跳躍し、3 番目以降が順次下降するという旋律形が、A 部分の穏やかな曲調を特徴づけている。ここで注目すべき点は「ihr matten 汝 疲れた」12小節目「fallet~zu 閉じる」の音が 7 度音程である点にある。（譜例 9）。

〔譜例 9〕



ここでバッハは、これらに「苦々しきもの」、あるいは「死」という概念を象徴的に表現する 7 度音程を用いることにより、それらが「死」という概念を含んでいることを表現している。また、そのあとに穏やかさを感じさせる順次進行で下降する旋律を用いる事により、その歌詞の意味が穏やかさの中にある事を表現している。

B 部分は一転して跳躍音程が多用されている（譜例10）。



## 〔譜例10〕

このような跳躍音程を多用する旋律は、決然とした印象を聞き手に与える。オーケストラはここからはバツ・オスティナートのみになる。この通奏低音のみの伴奏は、聴き手に旋律が孤立している印象を与える。これもやはり象徴的な表現と結びついていると考えることができる。すなわち、たとえ孤立しようとも世と決別するその決意、信仰は揺るぎがないという歌詞に内包されたその意味を作曲技法、楽器編成によって象徴的に表現しているのである。

再び現れる A 部分の後、短い間奏部分を経て68小節目から C の部分となる。この部分は、ハ短調という調性と B 部分と同様の通奏低音のみの伴奏であるために、旋律は孤立し不安な印象となる。しかし、77小節目からは同じ歌詞にヴァイオリン、ヴィオラが加わり響きの厚みが増し安定した響きとなる。そしてこの楽曲中もっとも美しい場面とも言える84小節目からの変イ長調に展開してゆく。ここからはテンポもアダージョとなり、そのゆっくりとした音楽は穏やかさを醸し出し、この曲の主題目である「süßen Frieden, stille Ruh. 甘美な平安、静寂の安らぎ」が鮮やかに表現される。このような音楽の劇的な展開は、「あの世では安らぎを見いだすだろう」という歌詞内容を楽器編成、調性及びテンポによって表現するバッハの緻密かつ卓越した作曲技法を十分に感じさせる。また、70小節目（譜例11）、79小節目（譜例12-1）の「aber dort」に対応させた音型、そして80小節目「werd'」（譜例12-2）の死を意味する象徴的な音型である7度音程の使用している。これは、「dort」とは死によって赴くことが出来る場所であり、続く旋律が穏やかな順次進行で高い音域を推移することで、その場所は安らぎの地であることを逐語的に表現している。これらのことも彼の表現に対する厳しさと緻密さを証明することになる。

## 〔譜例11〕

## 〔譜例12〕

もう一つ、このアリアを分析する上でバツ・オスティナート技法に着目する必要がある。この象徴的表現を、シュヴァイツァーは「歩みのモティーフ」<sup>(7)</sup>と名づけている。その定義は次のようなものである。

「規則正しく落ちついた音の歩みは強さと確かさを、落ち着きのないよろめいた歩みは疲れと弱さを表現する。」<sup>(7)</sup>

このアリアにおいて8分音符の歩みは、音楽がA-B-A-C-Aと展開する間、常に規則正しく刻まれる。このことから、このアリアではシュヴァイツァーのいう「強さと確かさ」<sup>(7)</sup>が象徴的に表現されているということが出来る。また、もうひとつの特徴としてその通奏低音が独唱バス、あるいは旋律と常に寄り添うように進むことがあげられる。特に「Fallet」という言葉の部分では常に3度音程で重なり合う。(譜例13)。

〔譜例13〕

このような二重唱的な用法は、その旋律の動きから「常に従う、伴う」といったイエスとの関係を語る時によく用いられる表現である<sup>2)</sup>。このアリアにおいても、このように象徴的な表現技法が複合的に用いられている。このような分析から、このアリアは、聖霊のお告げの成就という奇跡を体験したシメオンの揺るぎない神への信仰、そしてそれによってやがて訪れる「死」を満ち足りた穏やかな心持ちの中で受け入れる準備のできたシメオンの心情が、複合的に組み合わせられ用いられる作曲技法、楽器編成によって、緻密に表現されていると考察する事ができる。

### 3.4 第4曲レチタティーヴォ

減7和音で開始されるこのレチタティーヴォは、苦しみや死を象徴する減7の和音と、一気にEsの音にまで駆け上る激しさによって始まる(譜例14-1)。「Mein Gott! wann kommt das schöne: Nun! 神よ、いつそのときは来るのでしょうか」という歌詞に当てられた悲痛さを感じさせる叫びのような旋律は、絶望ではなく、シメオンがイスラエルの救いをひたすら待ち望むその望みの激しさであり、満ち足りた穏やかな「死」に対する強い憧れの心である。それに続く「da ich in Frieden Fahren werde, 私が平安の中で旅立つとき」は、旋律が高音域を順次進行によって推移する(譜例14-2)。それは旅立ちが天上界であることを表現している。そしてその旋律は、「werde」で再び減7度下降する(譜例14-3)。そして「Erde 大地」に向かって旋律は下降して行く。ここでも「Sande 砂」から「Erde」に向かっての下降は減7度である。(譜例14-4)。それは、「und in dem Sande kühler Erde. そして冷たい大地の中へ赴くこと」はすなわち「死」であることを7度音程により表現し、さらに「kühler 冷たい」という言

葉にbをつけて半音下げ、大地の低さ、冷たさを象徴的に表現している(譜例14-5)。しかし、次に続く再び「Schoße ruhn, 神の膝元に安らぐ」という言葉に向かって急速に旋律は上昇する(譜例14-6)。これは、天上へ駆け登る表象を象徴的に表現しており、それは音が上昇することによって神のいる天上界を示している。さらに「Schoße 膝」(譜例14-7)を半音あげることによってこの言葉の意味を強調している。

[譜例14]

そしてこの後に続く別れを告げる内容のアリオゾ「Der Abschied ist gemacht, Welt! gute Nacht. 別れをしよう、この世よ、おやすみと。」の旋律は穏やかに下降する。通奏低音が1オクターブ上昇した後、穏やかに2オクターブ下降し、その後を追うように独唱の旋律は動きを模倣して下降する。(譜例15)。

[譜例15]

この部分は、独唱と通奏低音がカノンと言ってもよい模倣進行になっており、その両者とも下降する旋律線によって、冷たい大地の中へ赴く「死」というものを象徴的に表現している。この部分においてバッハは「死」とは魂は神の御許へ、肉体は冷たい土の中へ赴くという、その死生観を表現している。このレチタティーヴォは、「死」という概念を音楽によって見事に表現した、バッハの作曲技法と彼の透徹した死生観が見事に結晶している曲である。

### 3.5 第5曲アリア

A (1小節から86小節 2拍)・B (86小節から115小節 2拍)・A (115小節 3拍から188小節) というダ・カーポアリアの形式で作曲されているこのアリアは、シュヴァイツァーが「突如として現れる恍惚たる喜び」<sup>(8)</sup>と述べているように、テンポの速い舞曲風の3拍子で作曲されており、激しい狂おしいばかりの熱気に満ち溢れたものとなっている。このアリアは、内省的な前2曲と違って激しいものであり、この作品の中では一見すると異質なものと感じる。しかし、その楽曲構造と音型による象徴的な表現を分析することによって、このアリアはこのカンタータ全体を締めくくる重要な曲である事が明らかとなる。

冒頭はヴァイオリンと通奏低音部がカノンのように開始される。(譜例16)。

## 〔譜例16〕

**5. Aria**  
**Vivace**

しかしこれは純然たるカノンというわけではなく、むしろ通奏低音部は、ヴァイオリンの旋律を模倣し、あるいは同時に進行するといった柔軟な動きを繰り返す。その表現形式の多様性は、このアリアが内包する感情を複合的に表現している。すなわち、カノンという形式によって「キリストのまねび」を、同時に進行するという旋律は、寄り添うこと、すなわち「従う」という意味を表現しており、ここでは「私は喜んで死を待つ」という歌詞を、神に自ら従うという象徴的表現を当ててその概念を表現している。

続く、独唱バスによって歌われる「freue (この場合は「喜んで待つ」という意味)」はコロラトゥーラ音型によって5小節間引き伸ばされている。(譜例17)。

## 〔譜例17〕

これはこの言葉をコロラトゥーラ音型によって強調する象徴的手法だが、この音型にはもうひとつ大きな意味が隠されている。それはこの音型の各小節の最初の音が、第一曲目アリアの旋律であり、この旋律が「ich habe genug」から派生したものであるということである。(譜例17-1)このような指示動機的な音型の扱いは、バッハが冒頭第1曲の主要動機(譜例1)を再現させることによって、冒頭の内容を聴き手の脳裏に呼び覚まそうとしていると同時に、この作品に音楽の一貫性を持たせようとしていると考えられる。ここにおいてこの作品の主題が明らかとなる。それは、シメオンの心情であった「Ich habe genug」(譜例1)の動機を「ich freue mich auf meinen Tod」の歌詞に当てることによって、「私」の待ち望むものが「死」という言葉によって焦点化されてきた「聖霊の啓示の成就」という満足感「genug」であると考察する。

また、「Tod」がその直前の d 音から g 音へ唐突に完全五度下降する。ここでも第4曲のレチタティーヴォ同様に、「Tod=kühler Erde (肉体の死=冷たい大地)」が音型によって象徴的に表現されている。(譜例17-2)

さらに B 部分では、「gebunden」が長く数小節にわたって引き伸ばされている。これも音による gebunden=「結びつけられた」という言葉の象徴的表現であることは明らかである。(譜例18)。

〔譜例18〕

mich noch auf der Welt ge - bun -

den, da ent - komm ich al - ler Not, die mich noch auf der Welt ge - bun -

[pianissimo] den, auf der Welt ge - bun - den. forte

そして音楽は再び A 部分を再現し、狂おしい3拍子の舞曲風のリズムの中でこのカンタータは終わる。

以上の分析から、このアリアはこの作品全体の到達点であり、待ち望む「死」とは、すなわち「聖霊の啓示の成就」であり、それこそが我々が待ち望むものであるという《カンタータ82番》の主題を表明する終曲を飾るにふさわしい楽曲であることが明らかとなった。

#### 4 おわりに

《カンタータ82番》の演奏表現法を探るために、歌詞の分析および彼の作曲技法の特徴である Figurenlehre (音楽修辞学) の考えに基づく多彩な音楽言語の分析による考察を行った。その結果、次のことが明らかとなった。まず、歌詞はルカ伝2.29にある「去る」という言葉、すなわち「死」をキーワードとして、聖霊の啓示の成就を体験したシメオンの満ち足りた心を描いた。バッハはこの歌詞を3つのアリアと2つのレチタティーヴォによって音楽化した。その3つのアリアは終曲に向かって鮮やかな展開を見せる。すなわち第1曲では、聖霊の啓示の成就の喜びを、第3曲ではその喜びが深い満足感に変わる様を、そして第5曲では、その心がやがて来るであろう「死」を待望する、それほど喜びであることを、彼の音楽言語である多彩な音による象徴表現を用いて見事に音楽化した。その音楽は、あらゆる表象を連想させ体感させることができる圧倒的な表出力とともに、聴衆とも密接に結びつけられた歌詞によって、聖句の内容を体感することができる現実性を帯びた音楽となった事が明らかとなった。すなわちバッハはこの作品において「聖霊の啓示の成就」というテーマをシメオンの心情を通して、その信仰の喜びを描いたのである。また、この分析を通してバッハの作品構想に関する側面が明らかとなった。それは、第2曲の分析で明らかとなった、このエピソードの聴衆=「私」への密接な結びつけである。この構想の目的は、教会カンタータのその日の礼拝で朗読される聖句の内容を注釈し、聴き手に分かりやすく伝えるという実用音楽としての本来の目的から考察す

ることができる。すなわち福音書章句の内容とこの出来事を思う、祈る「私」＝「聴衆」を深く関連づけることによって聴衆が容易に自らの思いをシメオンの心情と重ね合わせることができるようにし、それによって聴衆が福音書内容の学習と理解を容易に行えるようにしたのである。またこのような考えは次のようなプロテスタントの教義の根幹に根差しているとも考えられる。

プロテスタントは聖書の権威をみとめ、教義は聖書にのみもとづくとして、信仰と道德に関して教皇に絶対的な権威をあたえるカトリック教会の立場を否定する。したがって、ルターをはじめとする宗教改革者は聖書を翻訳し、一般の信者が聖書をまなび、教義について自分なりの判断ができるようにした<sup>(9)</sup>。

この作品は、まさに、「信者が聖書をまなび、教義について自分なりの判断ができる」<sup>(9)</sup>という考え方に合致する。追体験による宗教的感動の学習と理解。これこそがバッハがその作品制作の目標としたものであり、この分析結果からバッハの福音書に対する深い知識と理解、芸術家として、指導者として、一人のキリスト教の信者としての強い使命感と作曲理念が明らかとなった。そしてこの分析を終えて感じることは、私たち演奏家は、これらバッハの作曲意図を深く分析し、理解することが真の演奏表現につながる唯一の道であるということである。

### 使 用 楽 譜

譜例 1～11 および歌詞：Johann Sebastian Bach, Kantate Nr. 82 “Ich habe genug”  
BWV82, BREITKOPF & HÄRTEL

### 注

- 1) 「2 歌詞の分析」で用いた歌詞は Johann Sebastian Bach, Kantate Nr. 82 “Ich habe genug” BWV82, BREITKOPF & HÄRTEL のものであり、対訳は筆者の訳である。
- 2) この二重唱の象徴的な意味について、井形景紀は、井形ちづるとの共著であるマタイ研究会編『Passio Domini nostri J. C. secundum Evangelistam Matthaeum』マタイ研究会、1992年、30枚目のページにおいて《マタイ受難曲》第58番アリア（旧番号）の二重唱的な楽曲構造の説明の中で「バッハにとっては二重唱はイエスを語る為には大変重要な音楽手段である。」と述べている。

### 引 用 文 献

- (1) 共同訳聖書実行委員会『聖書』日本聖書協会、1987、(新) S. 103
- (2) 共同訳聖書実行委員会『聖書』日本聖書協会、1987、(新) S. 104
- (3) 角倉一朗監修『バッハ叢書 6 バッハのカンタータ』白水社、1980、S. 146
- (4) 角倉一朗監修『バッハ事典』音楽之友社、1993、S. 70
- (5) カルル・ガイリンガー著、角倉一朗訳『バッハ その生涯と音楽』白水社、1970、S. 176
- (6) 角倉一朗監修『バッハ叢書 6 バッハのカンタータ』白水社、1980、S. 146
- (7) アルベルト・シュヴァイツァー著、浅井真男、内垣啓一、杉山好訳

『バッハ』白水社, 1995, 中巻, S. 229

(8) 角倉一朗監修『バッハ叢書6 バッハのカンタータ』白水社, 1980, S. 146

(9) マイクロソフトエンカルタ総合大百科2003

## 参 考 文 献

小林義武『バッハ―伝承の謎を追う』春秋社, 1995

磯山雅, 小林義武, 鳴海史生編著『全作品解説事典 バッハ事典』東京書籍, 1996

井形景紀, 井形ちづる共著, マタイ研究会編『Passio Domini nostri J. C. secundum Evangelistam Matthaeum』, マタイ研究会, 1992

## Die Forschung über “Kantate Nr. 82 [Ich habe genug] BWV82”

Masato UENO\*

### RESÜMEE

Der Forschungsbericht ist die Forschung über “Kantate Nr. 82 (ich habe genug)”. J. S. Bach und der Texter dieser Kantaten dachten daran, dass die Hörer den Inhalt vom Evangelium nacherleben, um den Inhalt vom Evangelium zu verstehen und lernen. Damit J. S. Bach das Ziel erreichte, komponierte er mit seiner Musikalischen Sprachen. Und er drückte die Freude von der Erfüllung der Verkündigung des Heiligen Geistes aus.

---

\* Division of Music and Arts, Department of Music